

「ツール・ド・北海道」

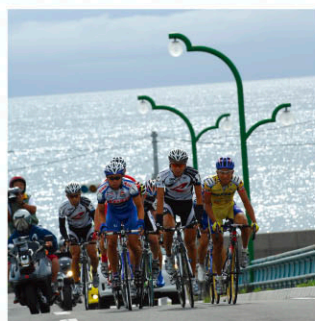


寿都町日本海岸を走行する選手達

今年21回を迎えたツール・ド・北海道は、9月12日小樽市での開会式に始まり、岩内、今金町など、日本海沿岸に沿ったアップダウンの多いコースを走り、更に長万部町、伊達市、室蘭市と噴火湾沿岸に沿って札幌を目指し、9月17日のモエレ沼公園のクリテリウムで、8市14町5村を走り継いだステージレースの幕を閉じた。

参加選手は、オーストラリア、ドイツなどの海外5チームに、シマノ、ZIPPなどの強豪チーム、日本大学、鹿屋体育大学チームなど、合わせて20チームの99人。マラカイトグリーンのリードージャージを巡る激しい優勝争いは、ドイツチームのヘンリ・ヴェルネルが、全行程677kmを17時間11分25秒で走破、2位のダレン・ラプトーン（オーストラリア）を8秒差で振り切って栄冠を手にした。最終日、ゴールにたどり着いた選手は70人。厳しいレースだったが、若い日本選手の活躍が印象に残った。

「ツール・ド・北海道」は、北海



登別市太平洋を背にオロフレ峠に向かう選手達

道開発が提唱し、1987年に始まった本格的なステージレースである。かつて日本経済が華やかだった頃、ツール・ド・フランスのようなステージレースを日本でもという思いに、地域振興の願いも込めながら、手探りで始めたイベントである。この事業を支えたのは、北海道内の企業などであるが、「この20年の激しい社会情勢の変化や、経



千歳市支笏湖から札幌市に向かって最後の山岳地帯を走行する

済の悪化といった状況に翻弄されながら、とにもかくにも21回を迎えることができたのは、日本自転車振興会の、強い支援があつたこと」と語ってくれた関係者たち。そして、同じ期間中に、選手達の駆け抜けたコースを走る市民レースにも、道外を含め750人もの参加者があり、今や北海道における自転車レースの底辺拡大に欠けてはならないイベントになつていとも聞いた。



島牧村を走行するメーン集団

ステージレースとは、ゴールした地点に宿を取り、毎朝次のゴール目指して連続して走る旅レースといつてもいい。選手達をサポート

トするのはチームのスタッフだけではない。警察の車、審判員の移動を支える数多くの車やオートバイ、オフィシャルのメカニシャン、地元の人たちによる立哨員、朝夕に、スタートとゴールの会場を設営しながら移動する人々、マスコミの人たち。100台近い自転車走らせるために、実はその何十倍といわれる人たちの働きがあつて成り立つのがステージレース。その舞台裏のスケールは想像を遙かに超えるものだ。

選手たちは、チームのエースを守りながら、コースの特徴や、相手の出方を見逃すまいと、細心の注意を払い、ひたすら走り続けるのだ。しかし、ただ走るだけでは勝てないのがステージレース。駆け引きとも言われる戦術や、戦略が大きな力を持つ。もちろん監督の果たす役割が大きいことは言うまでもない。そんな生身の人間が、沿道に集まった沢山の観客に励まされ、宿の食事に元気をもらい、地域の魅力を楽しみながら走るのがステージレースの魅力だといっ

てもいい。

雄大な北の風景の中を、色とりどりのジャージを着た選手達が、ホイールの風を切る音を残して走り抜けていく風景は、ツール・ド・フランスにも似た、北海道の新しい魅力を感じさせてくれる。ツール・ド・北海道は、自転車レースの世界を越えて、地域の新しい魅力を作り出そうとしている。自転車は、そんな不思議なパワーを持っているのかもしれない。



札幌市モエレ沼公園

競輪マークみつけた 〈札幌この美会〉

札幌市の「社会福祉法人札幌この美会」が運営しているグループホーム施設「サテライト2・6」は、知的障害を持つ人達が、生まれ育った地域で働き暮らしたい、と言う願いを叶えるために作られた施設である。家庭的な雰囲気にも包まれた施設は、日本自転車振興会の補助を受けて平成17年に建てられた。地域の暮らしに戻するために、24時間態勢で入所者の暮らしを支えながら、スタッフが一生懸命な努力をしている。関係者や職員は開放的で、地域社会に溶け込むように密着して、今後の施設のあり方を示すようだ。



サテライト2・6

「想いが、つながる 笑顔が、生まれる」競輪補助事業「RING!RING!プロジェクト」